

## ◇母の里の祇園祭の思い出

## 大槻伸次

遥か遠い思い出（昭和 20 年代）となってしまったが、祇園祭に母の里へ行ったこと、そしてやさしく出迎えてくれた祖母のことが、当時の祖母を超える年齢になっても、まだ懐かしく思い出される。祇園祭は、学校の夏休みが始まる日の 7 月 20 日～21 日で、学校や家事の手伝いから解放され、盆と正月と一緒にきたようだった。

母の里に行く日、両親に託されたお使い物をもって兄と 5 キロ先の母の実家へとぼとぼと歩いて行った。兄と 2 人でというのは、母はこの時期、収穫した小麦を政府に売り渡す（供出と云った）ための調整と俵詰め作業や田植えを終えた後の田の草取りに追われ、到底家を留守にできる状態ではなかったからである。

母の里に到着すると、親戚のおばさんや従兄弟たちが大勢見えていて、みんなによく来たねと声掛けされ更に、おばさん達からこの子たちは家の手伝いをよくするんだってねーとベタ褒めされる。そこで我々も感情がこみあげ言葉が出なくなってしまう。

そうこうしていると、祖母がやってきて、遠いところよく来たなーなー、ことしも母ちゃんは来なかったのか、あがれあがと身振り手振りでもこやかに出迎えてくれる。

そして押し込まれるように玄関を入ると、真正面の薄暗い部屋に焦げ茶色した大きな馬がいて、驚いたようにこちらを見つめ首を左右にゆらゆら揺らしていた。

母の実家は、時代劇にでも出てきそうな藁葺き屋根の大きな旧家で、南正面玄関を入ると真正面奥に馬の部屋があり、住いの中で家族同然に農耕馬が飼われていたのである。そして向かって右手の出入り口（東口、馬の出入り口）から裏口まで広い土間で、床は下駄糞で凸凹していた。馬部屋は、六畳敷き程の広さがあり、床には藁が敷いてあり正面には大きな飼い葉桶がチェーンで吊るされ、まわせん棒という取り外し自在のしきり棒が 4 本懸けられていた。

母の里に到着して一段落すると、歳の近い従弟が私たちのもろもろの世話を焼いてくれる（親が来ないのは俺達だけだった。従兄は祇園会場に出ずっぱりだった）。馬の世話は従弟の役目だそうで、馬についても色々教えてもらった。戦前は、馬にも名前と戸籍があって当時の馬は「天雲号」といったそうだ。さらに戦時には人間様同様戦地への動員令が下ったとか云っていた。また、馬は自身の放った大きな屁に驚くとか、立ったまま眠るのが当たり前で、馬が床に伏して寝てしまったら危篤だね、とかいろいろ教えてもらった。

馬の餌は「飼い葉」で、専用の機械（押切でもよい）で 3 センチくらいに寸断した藁と米糠やフスマ（小麦の精製カス）を混合した餌と新鮮な草を与えた。その「飼い葉」作りと草集めは従弟の大事な役目で、祇園祭だからといって飼い葉づくりから解放されるわけではない。そこで、我々も興味津々で一緒になって餌づくりをやった。

また、草刈りは朝飯前に大きな草刈籠を背負って、野原や道端などの雑草を鎌で刈り取って来るのである。そこで当時の子ども達は鎌を研ぐのが上手だったようだ。

我が家は小農だったから馬を飼わなかったので、草刈や飼い葉作りをした経験はなかった。（乳用として山羊を飼っていたので少々草刈りはさせられたが。）

そこで、田植え時の田んぼの代掻きや鼻取をした経験は残念ながらなかったから、子ども心に、なぜ我家は馬を飼わないんだろうと劣等感を持ったことがあった。小農とはいえ馬を飼わないということは、田畑の耕作や収穫物の運搬などすべて人力でするしかなかったから、我々は遊んでいる間もなく年がら年中、農作業に動員されてしまったのである。



祖母の家に到着して暫らくすると、祇園囃子を響かせながら屋台（祇園台車）がやってきた。屋台には着飾った老若男女が乗りこんでチャンチキ・チャンチキとやっていて、氏子の青年達に曳かれてきた。屋台の大きな車輪は道路の砂利を踏みしめギシギシと軋んでいた。地区に到着して暫らくすると若衆が孟宗竹の割ったものを車輪の下に敷き始めたので何が始まるのかと思ったらヨイショ、ヨイショと総勢で屋台の方向転換が始まったのである。とにかく強引に車輪を滑らしての方向転換するには驚いた。こんな燃えるような緑に囲まれた超辺鄙な片田舎に似つかわしくないような凄く立派な屋台で、上にあがって演奏する気分は最高だろうと羨ましく感じた。

夕刻には皆で祇園会場に出掛けるので、我々を含めた泊り客全員で早めの夕飯を戴くことになる。これがまた大変な人数で、八畳の部屋二間をぶち抜いて特製の長い膳が並べられ、全て手作りの田舎料理が見事に並ぶのである。おばあちゃん達は数日前からこの日の為に、歓迎のご馳走作りに精を出し準備したのであろう。

（当時は冷蔵庫なるものはなかったから保存のきくものが多かった。）

わいわいがやがやと賑やかな夕食が済むと薄暮の中、それぞれに連れ立って祇園会場に出掛ける。母の実家の従弟や従姉妹たちとはいつも顔を会わせているが、他の親戚の従兄弟たちは滅多に顔を合わすことが無いので、お互い慣れるまで時間を要した。

村の中央の祇園会場まで歩いて 10 分程度で到着するが、会場に近づくとつれ祇園囃子の音色がだんだん大きくなり自然と速足となる。

祇園会場のある集会所（神社）広場には金魚釣りなどの多くの夜店が並び、照明の灯がゆらゆらと揺れ周辺は照明用のカーバイドの匂いが漂っている。会場の中央には満艦飾に飾られた 3 台（各地区毎に所有する）の黒塗りの立派な屋台が並び、その屋台には浴衣姿の老若男女が勢ぞろいし、チャンチキ、チャンチキと調子のよいお囃子を囃し立てている。従兄も法被をつけ、ねじり鉢巻き姿で屋台の上でチャンチキチャンチキやっている。しばし祭りを楽しんだ後、それぞれのグループ毎に家に戻る。我々は従弟の案内で回り道して、さらさらと清流の流れる小川で「螢」が乱舞するのを見

てから帰宅したが、それはなんとも幻想的な風景で、後にも先にもそれ以上のものを観た事が無く、今でも脳裏に焼き付いている。帰宅すると、部屋のレイアウトが一新され、大きな蚊帳が幾張りも吊られ、布団が列をなして敷かれていた。就寝前、薄暗い灯が灯された上がり端で、皆でお茶など飲みながら談笑しているとその鼻先で、馬は吊るされた「飼葉桶（一斗樽）」の中に長い顔を突っ込み、がたがたと桶をゆらしながら「飼い葉」を食べていたが、目と鼻の先に馬がいるなんて驚きだった。

楽しかった母の里での 2泊3日のお泊りは、あっという間に終わって帰る日がやってくる。親戚のおばさん達や従兄弟たちも次々に帰り支度をしている。

最後になるのはきまって我々だった。というのは、従弟が段々寂しくなってくるので引き留められるというのもあった。そしていよいよ帰るとなるとおじさんやおばさん、従姉が表に出てきて自分達一人一人にお小遣い銭を渡してくれる。そして、気を付けて帰るんだよ、父ちゃん母ちゃんの手伝いをするんだよと声がけされながら、家を後にする。従弟は、一度に皆が帰ってしまうのに耐えられぬようで、寂しそうな顔をして手を振ってくれるが、涙ぐんでいたのがわかった。

ところが、このとき祖母は決まってこの場所に姿をあらわさなかった。(いつもの事だからお互い承知している。) 家族に別れを告げて門を出ようとする、いつものように祖母は植え込みの中から咳払いをして現れる。すると我々に高額（当時とすれば）なお小遣いをプレゼントしてくれる。もじもじしていると早くしまえと促されポケットに押し込まれる。祖母とすれば、我々が父母を助け家の手伝いを一所懸命やっているというのが耳に入っていて、励ましの意味もあったのだろう。また、末っ娘が祇園祭に来たい気持ちは人一倍あったろうが、来られないのを不憫に思ってせめて孫たちに何かしてやりたいという親心からだったのだろうかあとになって思えた。

夏休み前から指折り数えて待った母の里の祇園祭もあっという間に終わってしまつて、明日から現実に戻って夏休みの宿題や農家の手伝いが山ほど待っていたのである。

今夏（令和 2 年）、新型コロナ禍のなか、短縮されたとはいえ孫達の小学校の夏休みがやってくる。今年はおじいちゃん、おばあちゃんち（家）に来ても何処にも連れて行けないよ（例年は一週間程度の泊りの間、毎日何処かに連れて行った。）と事前に伝えておいたが、それでも孫達から来たいと云われてしまった。我々高齢者の立場からすれば、お互いの安全のためにも思って、ていよく来ないように事前に伝達しておいたつもりであるが、そうもいかないようである。そうとなったら、私らが昔味わった祖母の愛情を、孫達にも同じようにしてやりたいと考えているから喜んで迎えてやり、おじいちゃんおばあちゃん達の平凡な日常の生活を存分味合わせてやろうじゃないかと意気込んでいた。ところが、来るや否やスマホとゲーム機を取り出し、WI-FIに繋いでと言い出す始末。そして一週間、猛暑の中たつぷりと冷房の利いた部屋で、食事は上げ膳据え膳で、ゲーム三昧で帰って行った。帰った後、じいちゃんとおばあちゃん夫々宛に、感謝の手紙が残されていたが、次はもっと長く泊まりたいと記してあった。（2020/8/22 記）